

松井保彦著

『合同労組運動の検証 —その歴史と論理—』

松井保彦著・高田佳利監修、
「東京一般労働組合史」編集委員会編
発行：株式会社フクイン
・214頁・定価2500円＋税



書評

合同労働運動のこれから

本書の成り立ちと

刊行の意義

本書は、全国一般東京一般労働組合の松井保彦会長を中心とした「東京一般労働組合史」編集委員会による第三冊目の組合運動史である。東京一般労働組合は、すでに二〇〇五年、「人間らしい生活を求めて」および「東京一般をささえてきた人たち」を刊行し、今回発行の「合同労働運動の検証」は、その第三冊目にあたる。

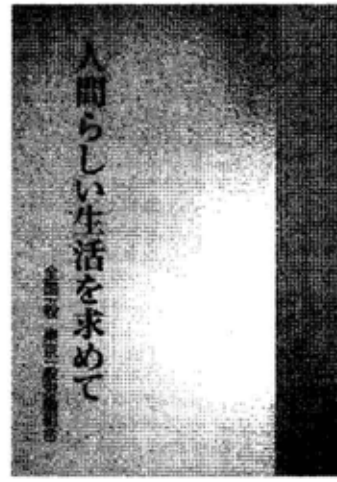
前二冊は、地域を基盤とする個人加盟の合同労働運動の歩みを正確に記録した実践的運動史であったのに対し、この第三冊目は、とくに第二部を中心に、「自らの四十数年に及ぶ実践運動に即して、企業別労働組合が主流を占めてきたわが国

労働組合運動のなかで、とかく見逃されがちだった合同労働運動の正当性を検証した（編集後記）ものであり、これまでの実践的運動史を基礎にした理論的・歴史の総括編ともいえる重要な一冊となっている。

合同労働運動が、その実践的運動の歴史の側面だけでなく、その歴史過程で積み重ねてきた組織および運動の論理、「合同労働運動の正当性」の検証が行われているのが本書であり、そこに本書刊行の最大の意義がある。

本書の構成・内容

本書は、次のように構成されている。
・第一部：戦後初期の中小労働運動（一九六〇年代半ばまで）



・ 第二部…合同労組運動の検証と、これから

・ 付属資料集(別冊)

このうち、第一部は、既刊二冊を前提とした実践的運動史の歴史編といつてよいものである。読者はそれによって、戦後初期の中小労働運動の誕生から、やがて総評中小企業対策(中対)オルグの設置を大きな契機に、個人加盟の合同労組づくりを目指す全国一般の組織と、運動のさらなる発展という運動史の流れを理解することができる。

運動史上の意義

本書の運動史上の最大の意義は、「第二部…合同労組運動の検証とこれから」にある。第二部の執筆者である松井保彦氏の長年にわたる運動経験の総決算といつてよい部分である。そこでは一貫して、「合同労組運動の正当性」の検証に全精力が注がれている。

その検証は、ナショナルセンターと合同労組運動の関係において(第一章)、労働組合法と合同労組の位置づけをめぐって(第二章)、合同労組運動の確立・全国一般の誕生という運動史上の意義において(第三章)、東京における合同労組運動の経験から(第四章)、個別労使紛争の増大の中での合同労組運動の機能と役割の検証から(第五章)、労働委員会活動と労使関係正常化を目指す活動経験から(第六章)など多面的に検証されている。

その検証に基づいた第七章…これからの合同労組運動は、松井保彦会長をはじめとする東京一般労働組合のメッセージそのものである。

個人加盟・合同労組方式を中心とする中小企業労働者・非正規労働者の組織化と大同団結を目指し、真の連帯と権利・待遇の機会均等の保障を実現するために、「未組織労働者の組織化」の取り組みの重要性を改めて再確認しているメッセージが今日の時代において、一層、意義を増していることは確かである。

評者 早川 征一郎

(法政大学名誉教授)